

アイヌを自覚するまで

10月17日（日）15：10～16：40 苫小牧会場

講師 宇梶シズエ アイヌ古布絵作家

皆さん、こんにちは。きょうはお目にかかれて大変うれしく思います。私ごとの話ですが、一人のアイヌが生きてきた過程で、民族という集団の中で一人のアイヌであるということを自覚するまで、すごい長い年月がかかりました。そんな中で自分を知るまでたゆまず頑張ってきたことが、今、皆さんの前で自分をお話できることかなと思います。

今、アイヌという言葉が使われますが、アイヌというものが何か、人間というものは何かということを理解する間もなくアイヌ、アイヌと罵倒されました。その、罵倒される言葉に、何か恐ろしいニュアンスから立ちすくむような、心の中に刺さっていくようなつらい思い。アイヌというものを避け、アイヌというものを自覚するまでの、何度身をよじってもよじりきれない、悩んでも悩み切れない思い。そういったことが、アイヌと言われてつらい思いの中で子供時代を過ごし、子供から少女期になる、少女期から娘、そして大人になるまで、その言葉を解決することのできない苦しみというのでしょうか、何と言ったらいいのでしょうか、表現のできないものを持ち続けました。

そのアイヌという言葉の中に秘められた社会的な大きな差別ですね、そういうものを見つめ、知りたいということをやっと、ああそうか、そうだったのか、そういうことであったのかと、自分で少し納得できるまで何十年という歳月を費やしてまいりました。

例えば、今このようなところで自分を語らせていただくというような機会を与えられた、そういう時期に来たのかなと。私たちは訴えたくても、訴える場所も聞いてくれる人もなく、そういう時期を過ごしてきました。しかし、すごい差別をいただいたおかげで、その果てに、すごい宝を見つけることができました。

それは、物すごく輝いたものです。この宝を見つけるまで、私たち、私と同じ祖先の血を引いた兄弟たちが、共通して味あわざるを得なかった社会的な屈辱と苦しみ、そういうものを越えてきて、真実を見つけ、真実の中にあっただけすごい宝物を見つけるまで、本当に70年以上の歳月をかけました。そして、この宝物をこれから成長していく、これから学んでいく同胞たちに、その宝物をともに磨いて、愛し合う、宝の中にあるすばらしいアイヌを分かち合える、社会の中に反映して貢献できる、そういうものに到達するまで、70何年かかってきました。

話はとめどもなく、苦しみの中のことばかり申しますが、私は、子供のときにアイヌ、アイヌと呼ばれたその言葉を

ずっと追求したおかげで、本当は物すごく大切なものを私たちは受け継いでいる、それは隠されて見えなかったんだけど、見えるようになるまでみんなで頑張ったおかげで見えてきたなって、よかったなって思っています。

作家とか格好いいことを紹介していただいたのだけれど、私の流れというのは、小学校の5年生か6年生のときに、隣のシャモのお母さんにかすりの上下をもらったんです。そのきものがうれしくてうれしくて、寝ても起きてもそれを着ていました。けれど、畑や田んぼに行く時には何かを背負って行くし、帰りは馬の草を背負って帰るし、それで、もう肩の辺は破れてしまいます。そうすると、大事な宝物だから、かすりの切れっ端を見つけてはつぎあてを刺すんです。それで、「お前の着物、それどっちが本体だ」と言われるくらいまで刺しました。そういう娘時代を過ごしてきたおかげで、刺すことが身につきました。いざ何か、物入れつくろうとしたときに、いきなり流れができたわけではないのです。

子供のとき、小学校に通わせてもらっていましたが、体が弱くて、年中急性肺炎だの何だのと病気になって休んでばかりでした。たまに学校へ行くと、明日から冬休みだの夏休みだのって、そう言いながら学校に行かせてもらいました。子供の頃から私は絵が好きで、紙っ端を見つけては絵を書いていた。新聞紙のふちが1センチか1.5センチくらいあいていますが、そんなところにも字を書いたり、読めない漢字は当て読みしたり、空欄があればそこに絵を書いていた。また、雪の上や土の上でも絵を書いたり当て字を書いたりしていました。

学校で同級生の描いた絵が貼られることがありましたが、私の絵は1度も貼られたことはありませんでした。そのため、絵を貼ってもらって誰かに見てもらうということが私の頭の中には何もなかったのです。私は何やっても認められないんだと、どこかで思いこんでいたものだから、全然焦りも感じないで生きてきました。

今から9年前、平成7年の暮れ、62歳の時でした。もう1回アイヌの刺しゅうを基礎から勉強したいと思って、札幌の刺しゅう教室に通わせてもらいました。3月で教室での講座が終わり、その後は実践ということで、スキー場の近いあった作業場に10月まで毎日通わせてもらって、アイヌの刺しゅうを勉強させてもらいました。私は、子供のときから針仕事や絵が好きだったので、12、3歳から18、9まで毎年農閑期には裁縫を習っていたので、和人の着物は

縫うことができました。でも、アイヌの着物は縫いたくなく
 かったんです。

うちの母は、静内の生まれのメノコです。アイヌプリと
 いうんですね、アイヌの生活習慣をしっかり持った人だ
 ったので、学ばなくても自然にアイヌの生活ができました。
 例えば、敗戦の年くらいまで囲炉裏の生活していたものだ
 から、鉄の鍋を火にかけて肉鍋をすると、鍋からつこぼ
 れるんです。そうすると、母が、「ああ、早く塩持ってき
 て、アベフチカムイに謝れ」と言うものだから、子供らも
 そうなのが普通になっていました。そんな時、私は流し
 にすっ飛んで行って塩持ってきて「火の神様、肉の汁こぼ
 してごめんね」と言って、火がぱちぱちいったら、ああ許
 してくれたんだなって、それで忘れてしまうんです。そう
 いう生活をしていました。

話が飛び飛びなりますが、13、4歳の頃、一緒に遊んで
 いた3つ、4つ上の姉さん方と一緒に河原に行って泳いで
 いました。いつだったか、2、3歳上のお姉ちゃんがよそ
 のおじさんから、家まで来られてでっかい声で怒鳴られ
 たんだって。何で怒鳴られたかと言うと、日本語で言う
 と生理だったのです。生理というのは、水の神様汚すと、
 その子供が、川に入って泳いだのが悪いと怒られたので
 す。うちの父は「シャモはどぶ流しても三尺下がって水清
 しななんて言っているけれど、アイヌは水1滴でも汚した
 もんだらああやって怒られるんだよ」と言っていました。
 そういった自然への接し方や、考え方を生活習慣の中で私
 らは覚えてきました。

よく兄弟や近所の友達とけんかをしたけれども、相手の
 欠点を言って罵っているのを親たちが聞いたもんなら、も
 のすごく怒られました。けんかはいいけれど、足が不自由
 だとか目が不自由だとか言われた人は、それでなくても
 不自由でつらい思っているのに、何で大事な体のことを
 言うのかと、そういった時は怒り方が違っていました。そ
 の怒り方で、私たちはやっていいこと悪いことというのを
 感じてきました。

アイヌは学校がなかったというのだけれど、生活の中で
 そういう、モラルというんですか、そういうものをきちん
 と大事にしてきたものです。貧乏であろうと金持ちであろ
 うと関係ないのです。金持ちのお嬢さんだから、丁寧に礼
 儀作法の学校に行ってお勉強するとか、礼儀作法を習うた
 めにお屋敷に上がるとか、そんなことではないのです。礼
 儀作法のためにお屋敷へ上がらなくても、その日その日食
 う物なくても、私たちはきちりとそういう大事なモラル
 を教わってきました。みんなで、遠い畑に弁当を持って行
 くと、どういうわけか箸を持っていかないんです。それで、
 枯れたヨモギなど、箸になりそうな棒っこを探してそれを
 箸にして食べるんですけど、その食べ終わった箸をぼんと
 捨てるとしかられました。ちゃんと折って、箸に感謝して
 置きなさいと。そのまま置くと悪いものが来て、魔が差す
 から、そういうことをしちゃいけないと言われました。子
 供の頃からそういったことを自然に教わってきました。

皆さんがアイヌの歴史どのように勉強されているかわか
 らないけれども、アイヌは、北海道という神様がおつくり

になった、そして私たち先住民にたくさんの知恵を教え
 てくださった大地を根こそぎ持っていかれて、私たちは置き
 去りにされたのです。大切な食べ物、大切なお仕事、あら
 ゆるものを全部持っていかれてしまい、大変不自由な思い
 をしたのです。

それで、親たちがその日その日をしのぐために出面とり
 という言葉、北海道だけにあるのかどうかわかりませんが、
 内地に行ったら出面というのだそうですが、その出面に
 出なければなりません。私ら子供は、今でも後進国の
 子供たちが、親や兄弟養うために何か売ったり拾ったりし
 ていますが、それに近いことを私たちはしなければなら
 なかったのです。でも、それでつらい思いましたということ
 ではないのです。親も一生懸命だから、子供たちも手伝う
 ということは当たり前のことだという雰囲気の中で育ったか
 らです。

囲炉裏のときは、親たちが出面に行った後、薪とりに山
 へ行っていてと言われて、近所の子供らと3、4人で薪と
 りに行くんです。それが、薪とりに行った山で遊んで遊
 んで、ターザンごっこをしたり、秋にだったらコクワやブ
 ドウを採ったり、食べたり、そうやって遊んで遊んで、夕
 方になって慌てて、いい加減な荷物を背負って帰ってくる
 んです。すると、薪でお尻をぺたんぺたん叩かれました。
 それはあちの家でもこちの家でも同じでした。それでも
 また同じこと繰り返すという子供時代を過ごしてきました。

そういう中でも、おれたちは大きくなって、どうい
 う人々の中に入っても、モラルだけはしっかりできると。
 人間として、人様にご迷惑をおかけしたり、人の物を奪い取
 って利用したりということはしてはいけないと戒められて
 きました。

私の父は、夏は昆布とり、冬になると山奥に上がって材
 木を切る仕事していたので、小学校3年生くらいまで昆
 布とりで浜辺に行き暮らしていました。私は荻伏という
 ところ生まれたのですが、幌島や白泉など浦河周辺を転々
 として、小学3年生まで、夏は昆布とりの小屋で暮らして
 いました。昆布がとれる日には、丘回りといってやっぱり
 出面とりのおばさん方が、朝早くから来て昆布の仕事を
 します。天気の良い日は姉茶というところへ行って、畑の
 草取りや畑の手入れしていました。その畑にはイモやカボ
 チャ、トウモロコシを植えていました。しのぐだけの畑
 は作っていました。冬になると、うちの父は造材の仕事
 で、どうい
 う人と契約するのかわからないけれども、前借りという
 のをするわけです。前借して、それどうい
 うふうに使
 うかと言
 ったら、うち子供が多いものだから、冬のメリヤス
 シャツを買
 ったり、冬支
 度をして、それから父は山に行き、
 正月、ち
 ょうど雪が降
 るころに帰
 ってきます。

これは習慣なのですが、春になって父が山から帰って
 来て、どうい
 うことがうち
 で起こるか
 と言ったら、
 村の昆布と
 りの丘回り
 をしている
 おじさんや
 おばさん、
 働けないエ
 カンやばば
 を5、6人
 うちに集め
 ます。まだ
 そのころは
 囲炉裏だ
 ったもの
 だから、一
 晩じゅう
 暖かいの
 です。それ
 で、どう
 やるかとい
 うと、今、
 東京のホ
 テルあた
 りでは1
 人前
 で何万円
 もする
 くらい
 の魚や
 貝が
 浜に
 行けば
 背負
 ってこれ

たものですから、それを、それを調理して大きなどんぶりいっぱいには刺身をつくったりチタタフをつくって、焼酎を買ってくるわけですよ。そして、エカシやおばさんたちと飲んだり食べたりします。焼酎なくなると「焼酎買いに行くべ」と言って焼酎を買いに行きます。そんなことで、父の持ってきたお金を1週間くらいできれいに全部使っちゃうんです。私は、うちの母が、「まあ、うちの父ちゃんったら、子供に服も買ってやりたいのに全部飲み食いしてしまおう」と、こぼしているのを聞いたことがあります。

私自身、東京へ行って、自分はいいふりしてシャモのまねをして、格好よく生きたいなと思ったんだけど、シャモと一緒に挫折して、アイヌでなきゃならないと思ってみたら親のことを考えると、父がやったことがありがたくてありがたくて、「ああ、ありがとう」って。きっとエカシやおばさんたちはみんな、うちの父が春に現金を持ってくるのを楽しみにみんな1年じゅう暮らしていたんじゃないかと思いました。うちの父のあだ名はツネさんだから、ツネさんが現金を持ってきたら、おいしい料理を食べて、おいしい焼酎を飲んで、歌って、いつもは足が痛い、どこが痛いと言っているばばたちが、踊りになると、どこからそんなに元気が出るのかと思うくらい、跳ねて踊ります。座るとまた「イタタッ」って、そんな生活してくれて、昔のアイヌもきっとああやっていたんだよねって。また、そうすることが楽しみのように追いつめられたんだなって思ったら、ああ強くて元気で愛がなければいけないと思います。

春になればシャモの言葉でギョウジャンニク、アイヌ語でプクサという山菜があります。春早く顔出してくれる山菜で、それをおかゆに入れたりおひたしにして食べるととてもおいしいのですが、物すごく臭うんです。そうすると、アイヌ臭い、臭いって、こう言われました。アイヌもだけど、よその民族のことを平気で「朝鮮人臭い」とか、平気でそういう人々がいますが、文化、食文化の違いを知らしめ合わないうちに、私たちの土地では展開してしまったのです。知らしめ合えば、理解し合えることから始まったのに、違うことをけなし合うことから始まったから、差別というものがあったんだと思いました。

そういう思いに気づいたときに泣きました。「はーっ」で泣きました。この布絵に出会ったのだから、やっぱりカムイの思し召しがあったのかと思っています。子供の時から、つぎして、つぎしてきたものを布絵にする時に、アップリケとかパッチワークを刻まなくても、そこにある布が模様になってくれて、そこにアイヌ模様を入れて、アイヌの神謡集とか、ウエペケレとかユカッ、そういうものをそこにに入れて、誇り高い物語の絵をつくれるということに気づいたときに、私はまた泣くんです、人からは「あなたの涙腺は人の3倍ある」って言われることもあります。

刺しゅうをしていると、いろんなことを考えます。そういう時間は、たくさん大切なことを思い出したり学んだりする、そういう時間ではないかなと思っています。

私はあんまり言わないんだけど、「差別された、されたってあんまり言うな」と言う人がいます。それを越えなければいけないと言います。越えようと思っているから私ら一

生懸命生きているんです。だけど、「アーイヌ」、「アーイヌ」と言われ、じっーと見て、こちら辺に毛が生えてるだの、子供の時なんかは、耳のところ真っ白に毛が生えていると言われて、人と違うということを言われると、子供はどうしたらいいかわからなくなります。どこが違うんだろう、何なんだろうって、とまどってしまうよね。私は深い差別いただいたおかげで深く知りたいと思ったことがすごくよかったなと今では思っています。余り苦勞をしていない人はこの室に到達しづらいのではないかなと思います。

私は刺しゅうをしていたんです。その時、この糸はどこから来たんだろうと思ったんです。布も糸から生地になっているよなって、しめ縄やわら縄はどこまでいっても縄で、その元は木の繊維や、草の繊維からできていると考えると、それを見つけた先祖はすごいと思います。はじめは繊維を縛っただけだったのが、その繊維をよってみると何百倍も強いということに気づいたのではないかなと思います。

よくシカのアキレス腱とか使ったすばらしい細工がありますが、皆さん先祖の方がそういうことを見つけてこられたのです。こういう刺しゅう糸ひとつにしても先祖が残してくれた知恵が詰まっていると思った時に、「アイヌ」、「アイヌ」と言われ心に刺さったたくさんのとげが、ぼっ、ぼっとはがれていくんです。

若いころ東京に行って、いいふりして遊んだり買い物したり勉強している時に、口論になることがあったのですが、誰かが「うちの先祖が武士だった」と言うと、なぜかみんな黙っちゃうんです。何で「武士だった」って言うと黙るんだろうなって。シャモの人たちには昔かたき討ちという制度があって、ああ、そうかって。北海道で言えば「シャモ」と言えば黙るか、それと同じかと思ったんです。

武士というのは刀持って人を殺して、それが奨励され、例えば親が殺されたら、何十年かかってもそのかたきを捜して大衆の面前でかたきを殺して、そして誉められて、またいい地位にさあがるという制度があったのだけれど、アイヌには、武器をつくって戦争の準備だとか、かたきを打って手柄を立てたとか、そういうことは昔話の中にも、囲炉裏の周りで子供もいれば年寄りもいれば血気盛んな人もいて話をしますが、その会話の中で、人を殺してもいいというような話は出てきませんでした。

このことに気づいたときに、物すごく強い人たちだったんだということに気づいたのです。強くなければ、おびえて、そういう武器をつくったり、かたきを討ったり、戦争をしたりしたのではないかと、おびえているから、より人を殺しやすいものをつくるんだろうなって思いました。

縄文をつないできて、アイヌがあるのと思っていますが、学者さんの中には、アイヌは先住民ではないと、定義する学説を発表する人がいます。人の心を逆なでするようなことをアイヌに断りなしに、文字を用いて発表するのです。

アイヌには世襲制がありません。戦争が終わったころ、酋長という言葉がはまりました。どことこの酋長、どことこの酋長という言葉があったと思うのですが、この言葉がどこからきたのかというと、アメリカで先住民のことをいじる白人たちが、野蛮人の大将という意味で酋長という

言葉を使ったらしいんです。それが、日本ではアイヌの長(おさ)のことを酋長というようになったのだと思います。アイヌの長の息子は必ずしも長になれません。先人の知恵や大切な哲学、モラルをしっかりと受け継がなければならないのです。私たちは、子供から大人へ成長する中で困り裏を囲んで話す大人たちから学んできました。アイヌに世襲制がないということも、そういった中で学びこれはすごいことだと思ったわけです。社長の息子が社長になる、政治家の2世、3世が出てくる、あの人たちは田んぼの草を取ったこともスコップを持って土方や出面をやったことないですよ。そういう人たちが上からものを考えて、それに私らの生活をゆだねているという悔しさがあります。

それから、人と競うことです。東京に行ってシャモと一緒に遊んでいると、こういう話になるんです。誰のうちのピアノがあって、誰のお父さんは社長で、誰がこうで、と競っているんです。自分の周りを見るとみんな高校を出た人ばかりで、私は高校出たといったら天上の人だと思っていたのですが、そういう人たちは物すごく不満があって愚痴を言うんです。どここの大学でなければいけないということを言って、ほめることをしないんです。それで、すごく地位のある人たちを敬うんですね。そういうシャモとの暮らしの中で、あらあと思って、悲しい、寂しいということが身に迫ってきました。

私は、いろいろな病気になって、何回も病院に入ったことがあります。1度は頭を開けると言われた時に、そんなことをしたら半年も持たないと思ったから病院から逃げて帰ってきました。その時、「ああ、死ぬんだな」と思ってそれなら、東京で死ななきゃならいと思いました。死んだ時にどのような形で送ってもらおうかを考えた時に、たくさん宗教があるのですけれど、自分で納得できるものがないのです。最後にアイヌブリで送ってもらえたらきれいな血のまま死ねると思いました。そういったことを考えた時に、私も偉そうなこと言っていますが、そんなに格好よく生きていたわけではなく、物すごく恥をかきながら生きてきて、そういう死と向き合ったことでアイヌを自覚することができました。

そのうちに、誰の子供だからわからない、ウタリの子供たちが、おばさんのところに行ったら何とかなるということでも何人も来るようになりました。私もそんなに生活は裕福ではないのですが、その子供たちに野菜のいためたのや、肉だの何だのをどんぶりに入れて、ご飯とか漬物を出してあげました。そうすると、子供たちは箸をつける前に私の顔をじっと見るんです。ああ、この子供たちは食べることから傷ついてきたんだと思いました。その子供たちが大きな顔して食べるようになるまで、私も下を向いて食べていました。その子供たちの様子を見て、子供たちの傷の深さを感じて、子供たちが自由に育つためには、まず、自由に食べることが必要なんだと思いました。

それから、みんな14、5歳になってから私の所に来るんですけれども、そのときももう未来に向かってるので物すごく血気盛んで、地道に教育しようと思ったって子供らのエネルギーがすごいんです。その時に、子供というもの

はちゃんと両親のもとで育て、おしり叩かれようが何しようが、ちゃんと愛情豊かに教育されるべきものだと思います。こういう子供たちをつくってはいけないと、その子供たちに教えられました。

私の息子は昔、暴走族をやって、今、俳優をさせてもらっています。私が子供を育てている時の思っていたのは、私の子供たちがおばあちゃん、おじいちゃんのところ行くと、おばあちゃんは優しく小遣いくれるし、私のアイヌの兄弟たちもかわいがってくれる。学校の面談に行けば、学校の先生も自分の息子の自慢するようにして、私は何しに来たんだかと思うくらいかわいがられて育っていたので、子供は元気でさえいればいいと思っていました。そして、私には病気のことがあったので、この子たちが20歳になるまでは生きていたいと思っていました。長くは生きられないと思っていましたので、草葉の陰からでは手を出したくても出せないし、生きていけばこそ、悪態をつかれようと、わが子をしっかりと見られると思っていました。そのころ、うちにはよその子が何人も出入りしていて、その時私の子供たちは「お母さんはよその子のことばかり考えて、何で自分たちのことを考えてくれないんだ」という気持ちがあったようです。本当は寂しかったんだということがわかり。手紙を書いて謝りました。そういうふうにして、うちの子供は誰かが見てくれたので、私はよその子供の面倒を見ていました。うちの子供たちにしてみれば、「お母ちゃんは自分たちのことを粗末にした」「お母ちゃんが悪い」、「家にいないことも多い」と思っていたようです。その辺は息子の本に書いてあるとおりで。

私はアイヌの血を信じて、運動をしてきました。会議で運動のことなどメモをしようというのと、「あんた、小説書くために運動やってんだべ」と言われたりもしましたが、私はそれは違うと思っていました。私たちの血の中には、専門学校や大学へ行かなくても、ちょっと手を貸せば彫刻家になれたり、刺しゅうかになれたり、山の食べ物博士になれたり、農業の学校に行かなくても農業ができるという自負があります。それを何とか世の中に、自分自身がアイヌであってよかったと思えるようになるまでになればいいと思って運動をやっていました。

シャモとアイヌが恋愛しても、結婚する時はシャモ同士になってしまうというのを周りを見ていたので、私はアイヌともシャモとも結婚しないと断っていました。どうしてアイヌと結婚しないのかと言ったら、自分の子供がまた毛深くて、また「アイヌ」、「アイヌ」と言われるだろうし、私の年代のアイヌの中で「シズエ、おれと結婚するべ」というような元気なアイヌもいませんでした。アイヌの青年はメノコがシャモの憧れているのは本能的にわかるんです。だから元気がないんです。そんなんで魅力もないんです。

嫁に行けと言われて、私は小学校からやり直すから学校に行きたいと泣きました。そして、すったもんだがあって、20歳で中学に入ることになりました。20歳で中学校に入って、ミズが違ったような字を書いて13歳の同級生の勉強についていけなくて泣きながら勉強しました。いろいろなことがありましたが、一生懸命、一生懸命追求したおかげ

で宝を見つけたわけです。私たちの同胞はみんな宝を見つけているはずで。私が言うのではなく、長年続いた文化が私たちに悟らせてくれるということを伝える義務があると思っています。私たちを差別した周りのシャモとかそういう人たちではなく、国家が奨励した差別の中でいたということを書かなければならない。それで、国家に向かって、私たち先住民は、ただ生きてきたのではないと。しっかりしたものを持っていることをあなた方はしっかりと受けとめるべきだと。私たちには訴える義務があるけど、あなた方にも受けとめる義務があるということを私は言いたいのです。

今は、この大地の上であるものが、それはすばらしく科学が発達して、手の届かないような、私たちが感ずることのできないような、発展という言葉ですかね、そういうものがありますけれども、一方、大地を上から見ると、こうこうと輝いている、土がくれた食べ物や薬草、それにつながる考え方や物語、その生かし方、私たちの先祖から一人一人たくさんの財産として受け継いでことを次の世代に教え、伝えていくため、私たちは受けとめているわけです。

それを丁寧に、そして、一番大事なことは、自分を一番に愛すれば、人のことも大事にして、愛することができるということをお子たちと一緒に考えて、そして生きていく、そういうことを考えています。昔、大人たちは、「おれたちはな、ばかにされる人間ではないんだ、すばらしいんだ、すばらしいんだ」と言っていました。でも何がすばしいかわからないし、一歩外へ出ればアイヌ、アイヌっていじめられるし、何がすばらしかったの、どうだったのって聞くすべはないのですが、彼、彼女たちが生きてきたその姿の中から、私たちは思い起こすことができます。それを大切に伝えていきたいと思っています。

〔質問〕 私は釧路の鶴居村で生まれましたが、宇梶さんと同じです。もう本当に、浦河の姉茶とも。釧路であろうと日高であろうと、受けた子供時代の差別というのは同じです。

〔宇梶〕 差別、差別と言うだけではなく、差別を受けたからこそ真実が見えるという、それが見えるにつくられたものだって。差別というものは誰かがつくって、誰かの都合でつくられたものということをお自覚しなきゃ本当に恐ろしいんだということに気づきました。

〔質問〕 私はそれをバネにして、学校を卒業して正看になって釧路市立病院で看護婦になりました。しかし難病にかかってしまい看護婦は断念せざるを得ませんでした。子供を産んでもだめだと言われたのですが2人の子供生まれて、今は孫も3人おられます。孫の1人がアメリカに1年、イギリスに半年行っていました。そこでいろんな人種と巡り会って語り合う中で、自分の祖母がアイヌだということを書いてきたようです。本当にうれしかった。そういうふうには、やっぱり子供たちの中で変化していつている。

〔宇梶〕 昔、うちの暴走族さんがさんまさんの番組で、言わなくてもいいところで「僕のお袋はアイヌ」でとか何とかと言って、突っ込まれてはいたけれど、何かにそう言われたのではないかという気がします。

〔質問〕 70何年間差別され続けて、それでも強い気持ちを持って生きていくことによって宝を見つけたと、言われていたんですけども、その宝というものを具体的に聞きたいんですけども。

〔宇梶〕 一番強いのが、私は両親のもとで育ったの。他のウタリ、同胞たちには両親のいない人がたくさんおりました。生きていくのに、やっぱり親というのは厳しいけれども、支えてくれます。それで、大きくなってアイヌが見えてきた時期がすごくあります。でも、振り返ったときに、私が振り返ることができたのは、両親がしっかりいて、兄ちゃんがいる姉ちゃんがいる、それで、食うや食わずでも3食食べてきたということが強さにつながったんです。それと、やっぱり同胞たちが、弱いというのではなくて、支えてくれるものを貧乏で失ってしまったことです。貧乏というのはどういう貧乏かということ、大事な友人を失ってしまうことです。無くなってしまう、小さいときに。大きくなってからじゃないですよ。そういう人たちが育っていくときに、アイヌから、逃げてしまいますのです。私でさえも、両親から逃げました。その人たちは、どう解決したいかわからないのです。わからないことは弱さにつながります。わかることは強さにつながります、そういうことです。

強くなるということは、わかるということですね。納得できる。そして、1歩納得できたらもう1歩歩けるということ。それが強さだと私は思っています。だから、同胞から「今さら」と批判されることもあります。強くなれば良いと思っています。5尺足らずの私がどんなに「アイヌ」って言われても、そんなの屁でもない。それよりも、その人が1歩強くなるのがすごく大切だと、私はそう思ってきました。だから強い。

それから、真実を知ってきた者が強くなってきた。真実を知ってきたら、だれが何といたって、自分で自信を持っているから強くなれるのです。